

平成 21 年 6 月 11 日現在

研究種目：基盤研究 (B)
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17320083
 研究課題名 (和文) 多言語多文化共生社会に立脚したウェブ言語教材における
 言語能力記述モデルの研究
 研究課題名 (英文) Developing a Descriptive Model of Language Ability and Web-Based
 Foreign Language Teaching Materials in a Multi-Lingual, Multi-
 Cultural, Symbiotic Society
 研究代表者
 吉富 朝子 (澤野 朝子) (YOSHITOMI ASAKO) (SAWANO ASAKO)
 東京外国語大学・外国語学部・准教授
 研究者番号：40272611

研究成果の概要：

多言語多文化共生社会になりつつある日本において、有用な多言語学習用ウェブ教材を作成・公開した。また今後、教材を改善し、学習者言語能力の評価・向上をしていく上で不可欠な言語能力記述モデルを開発するためのさまざまな基礎研究を各国言語学、理論言語学、外国語教育学の各分野で行い、論文・学会発表・図書 の形でその成果を公表した。これにより、異なる言語に共通の言語能力評価枠組みを構築する際の研究基盤を形成することができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	4,900,000	0	4,900,000
2006 年度	6,200,000	0	6,200,000
2007 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総計	15,000,000	1,170,000	16,170,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：言語教育学，言語理論，言語能力記述，e-learning，多言語記述

1. 研究開始当初の背景

世界レベルの急速なネットワークの高速化により、日常的にインターネットに接続できる時代になった。東京外国語大学においても、21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」において、「TUFS 言語モジュール」と呼ばれるマルチリンガル・ウェブ教材が開発され、実際に授業の中にも導入された。しかし、いくつかの言語については教材開発が完成しておらず、完了している言語についても、評価基準を開発す

るための言語能力記述に関する基礎研究が必要であった。

2. 研究の目的

本研究では、インターネットを活用した言語教材を用いた学習と教育における言語能力記述のあり方を、文法理論、音声学、語用論、応用言語学、e-learning などの多角的な角度からクロス言語的に考察し、ユビキタス環境における自律的な学習環境での言語能力記述方法を

考究した。研究対象は英語、フランス語、ポルトガル語、アラビア語、インドネシア語の5言語で、言語類型論的に異なるこれらの言語の3つの教材（発音・会話・文法）について共通の言語能力記述を検討することで、多言語多文化共生社会における言語能力記述モデルの一般性を追及した。

3. 研究の方法

本研究では、研究組織を個別言語班、言語理論班、情報班の三つに分け、言語理論班では、多言語主義と言語能力記述、音韻論・音声学と言語能力記述、語用論と言語能力記述、およびシラバス設計と言語能力記述理論についてそれぞれ基礎研究を行った。個別言語班では、英語・ポルトガル語・フランス語・アラビア語・インドネシア語の教材開発と言語能力記述を試みた。また、情報班ではe-learningに基づく教材開発、言語能力記述、およびこれらを可能にするためのシステム開発を行った。

4. 研究成果

(1) 言語理論研究

①多言語主義に関しては、EU言語政策の理念的枠組みと各国ごとの言語教育政策の運用と現場とのギャップ、教授法の成果の評価に関する研究を行い、「ヨーロッパ共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Languages, 以下 CEFR)と日本を含む諸外国における言語教育事情について5回の研究会を開催した。

②音声学・音韻論については、英語のプロソディーやプロミネンスに関する文献研究および教材研究を進め、日本語話者が英語の発音をする際に犯しがちな間違いに、母語干渉がどの程度あるのかを探るため、学習者データ収集と分析を行った。

③語用論については、実際の教育現場で教材として語用論がどのように導入されてい

るのか、実態を把握するため、中学校・高校の英語オーラルコミュニケーションのほぼすべての検定教科書と一部教師用指導書における語用論的要素の扱い方を調査した。

④言語能力記述に関しては、CEFRの他、British National Curriculum (BNC)、ACTFL、Canadian Benchmarkなど、欧米の一般的な言語能力記述モデルを解析し、その特徴を記述した。欧米の言語文化圏とは明らかに異なる日本およびアジアという言語文化的文脈において、このような欧米のモデルがどの程度まで応用可能であるのか、その可能性について、Can-do調査を実施し、考察を行った。

また、Can-do statementsの妥当性検証研究の一環として、高校生に英語のインターネット・ラジオを聞かせて、どのような聞き取りが可能なのかを調べた結果を学会で発表し、コミュニカティブ・テストングの理論と実践を著書としてまとめた。

更に、情報班の実施する学習者アンケート結果を解析し、言語能力記述ポートフォリオの各項目と言語理論との関連性を考察した。発音教材の項目に関しては、自然音声学や機能音韻論の見地から、会話教材と文法教材に関しては、機能シラバス、認知言語学や語用論の観点から分析し、ポートフォリオの理論的な説明原理を明確にするための基礎研究を進めた。

加えて、CEFRにおけるリスニング・レベル推定がテキスト情報からどの程度可能かを統計的に検証し、CEFRリスニングのcan-do statementsに含まれる様々な特性のうち、レベル判断に貢献している基準特性(criterial features)を明らかにした。

最後に、英語学習者コーパスを用いた第二言語習得研究の成果に基づいた言語能力記述および評価の可能性について探求した。

(2) 個別言語研究

①英語に関しては国際語としての英語の位置づけを考慮し、目標とすべき発音の能力とはどのようなものか、特にリズムやプロソディーの面からその定義をすべく基礎調査を行った上で、日本人英語学習者の英語発音分析、とりわけプロソディーに見られる母語干渉の研究を行った。音声評価については、発音の評価方法を探るべく、発音に関する知識と実際の発音との関係についてのデータ分析をおこなった。

日英対照・中間言語語用論の立場からは、日本人学習者が英語を習得する際にどのような事柄が語用論的に躓きとなるか、日本人英語学習者および英語母語話者を対象とした実態調査を行った。また、中学校および高校の英語オーラル・コミュニケーションにおける語用論的要素の扱い方を調査し、分析結果を反映した教材作成に着手した。更に、日本人英語学習者が産出する中間言語における語用論的母語転移を探る調査、および英語母語話者の理解度・容認度を調査し、両者の比較分析の結果を和英辞典のコラムとして公表した。

評価研究については、言語能力判定テストの実施と併せて、レベル別の e-learning 教材の市場調査を行った。日本人英語学習者の学習者コーパスを活用した言語能力評価法を模索する基礎研究なども進められた。

②フランス語については言語パスポートを利用した言語能力記述（とくに話す・聞く）のアンケートと会話教材についてのアンケートを実施した。また、教材内のレベル分けと学習目標の設定を明確化し、それらを基にした言語能力記述のプロファイルを作成するために、フランス語会話教材にあらわれる言語機能と CEFR の間の関連づけを試み、言語ポートフォリオに関する基礎研究を行っ

た。更に、文法プロファイルと文法習得段階について考察した。

③ポルトガル語に関しては、文法教材や発音教材を開発した。また、外国語としてのポルトガル語教育の現状についてリスボン大学で調査を行ない、ポルトガル語検定試験の問題点について整理した。また、欧米で行われているポルトガル語能力検定試験について調査を行うとともに、欧米での研究との比較対象を念頭に置き、ポルトガル語の学習者コーパスの整備に努めた。

④アラビア語に関しては、アラビア語口語（方言）の指導のための文法教材や発音教材を開発した。これらの e-learning 教材はウェブ上および「アラビア語入門」テキストと付属会話 CD の形で公開し、授業に導入された。

⑤インドネシア語に関しては、文法教材や発音教材を開発し、ウェブ上で公開した。また、インドネシア大学及びガジャマダ大学にてインドネシア語教育に携わる研究者と意見交換も行なった。評価研究については、インドネシア語 e-learning 教材のうち、文法モジュールの妥当性の検証を行った。文法能力記述については、国内外の文法書や論文などの文献の比較研究も行なった。

(3) 言語情報工学研究

従来利用していたサーバーに負荷のかかる Real Server 経由の音声配信をやめ、mp3 形式による音声リンクを実現することで、発音教材の操作性の向上をはかった。すでに行なわれている Web Class による e-Learning において、アカウントを発行している全学の学習者による教材評価を自動的に蓄積し、同時に学習者の動機や目標のプロファイル化を円滑に行うために、既存のサーバーを更新すると同時に e-Learning システムを改良

し、新たな e-Learning システムのプログラムを外注により開発した。また e-Learning システムの保守も行った。

情報工学を活用した言語教育学研究としては、日英対照研究・日英翻訳論や翻訳における誤用分析論を検討し、日本語の連続動詞と英語の句動詞に焦点を当てて、言語体系上対応しない言語現象が、第二言語習得の上で言語能力の記述に及ぼす影響について検討した。従来の語彙の意味説明や文法上の規則説明よりも、概念表示レベルの説明手段が言語能力育成には有効であることを実証的に示す試みを行い、ウェブ言語教材説明のために、認知的アプローチに基づく説明概念を Ajax と Ruby on Rails 技術を利用したウェブ教材インタフェースを使って試作した。また海外の大学と提携して、語学教材の e-learning システム上の利用状況を示すアクセスログを調査する長期的評価を開始した。

これらに加え、言語能力記述ポートフォリオを e-learning システムに実装し、レベル別の到達目標及び観点別のアンケートを学習者に対して行い、そのデータを大規模記憶装置に蓄積した。

教材開発については、英語学習者のための句動詞学習サイトを作成した。これは学習が難しいとされている句動詞の認知的な解釈イメージを視覚的に示すことで、句動詞の意味理解を促進し、学習効果を高める英語教材提供のためのウェブサイトである。この他、日本語教科書テキストのタグつきコーパスを作成し、語彙分布分析を行うとともに、視聴覚手法を用いた字形認知漢字教材も開発した。

(4) 今後の研究開発

本基盤研究の最終年度には、東京外国語大

学外国語学部に英語学習支援センター (English Learning Center, 以下 ELC) が設置され、自律的学習者育成のための学習支援および教材開発と評価システム構築が開始された。(本基盤研究の代表者は、ELC センターである。) ELC では、本基盤研究の成果を十分に活かし、「英語学習支援・評価システム連環プログラム」を5年以内に完成させることを目標としている。評価は CEFR に準拠した形で広く世界に通じる基準に基づきつつも、独自の視点に根ざしたレベル認定とし、学生に対して「TUPS 言語パスポート」を発行予定である。言語パスポートには、一貫的能力指標としての標準テストスコア、e-learning 学習における理解能力評価などの量的評価、ポートフォリオ形式での産出能力評価を記載し、「何がどの程度できるのか」を質的に記した Can-Do 記述を併記する。

東京外国語大学では、将来的にこのような英語のプログラムをモデルケースとして、多言語評価システム構築への道を開くことも視野に入れている。欧米言語のみならずアジア言語も含めた多言語評価システムは、世界でも極めて稀であり、先進的な取組である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 71 件)

① 根岸雅史 「CEFR リスニングレベルの決定要因を探る」*英語教育・英語学習研究 現場型リサーチと実践へのアプローチ* 226-235 (2008) 査読無.

② SAITO, Hiroko. “/ eə/ or / ε : / ? : Monophthongization of SQUARE words in RP and Transcription in Dictionaries.” *Lexicon*, 37: 1-9. (2007) 査読有.

③ 富盛伸夫 「言語理論と言語教育の統合は可能か」 *言語情報学研究報告 9 号*: 124-139. (2006) 査読無.

④ RATCLIFFE, Robert.

“Semi-Productivity and Valence Marking in Arabic: the So-Called ‘verbal-themes’.” *Corpus-Based Approaches to Sentence Structures. John Benjamins. Usage-Based Linguistic Informatics Series, Vol. 2*: 179-190. (2005) 査読有

[学会発表] (計 15 件)

① TAKEUCHI Machiko, SANO Hiroshi, & SHIBANO Koji. “Evaluating Waystage and Threshold Vocabularies by the BNC and the Google 1T.” *American Association for Applied Linguistics*. 2009 年 3 月 21 日. アメリカ合衆国コロラド州デンバー.

② 林俊成 「視聴覚手法を用いた字形認知漢字教材」台湾淡江大學主催黄憲堂先生記念講演. 2008 年 12 月 24 日. 台湾・淡江大學.

③ 黒澤直俊 「シンポジウム —外国語の教科書 ボルトガル語—」外国語教育学会. 2007 年 11 月 18 日. 東京学芸大学

[図書] (計 32 件)

① KAWAGUCHI Yuji, MINEGISHI Makoto, & DURAND Jacques. John Benjamins. *Corpus Analysis and Variation in Linguistics*. (2009) 399pp.

② YOSHITOMI Asako, UMINO Tae, & NEGISHI Masashi (Eds). John Benjamins. *Readings in Second Language Pedagogy and Second Language Acquisition: In Japanese Context. Usage-Based Linguistic Informatics, Vol. 4*. (2006) 271pp.

③ 花本金吾, 野村恵造, 林龍次郎 (編). 旺文社. 「コアレックス英和辞典」(2005) 2217pp.

④ 降幡正志. 白水社. 「インドネシア語のしくみ」(2005) 144pp.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

「欧州の言語能力アセスメント動向から考える日本の英語教育の今後」 ARCL 第 2 回研究レポート 2008 年 10 月 <http://www.arcl.e.jp/report/2008/0002.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉富 朝子 (YOSHITOMI ASAKO)

(澤野 朝子) (SAWANO ASAKO)

東京外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号: 40272611

(2) 研究分担者

富盛 伸夫 (TOMIMORI NOBUO)

東京外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号: 50122643

川口 裕司 (KAWAGUCHI YUJI)

東京外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号: 20204703

斎藤 弘子 (SAITO HIROKO)

東京外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号: 10205669

黒澤 直俊 (KUROSAWA NAOTOSHI)

東京外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号: 80195586

ラトクリフ ロバート (RATCLIFFE

ROBERT)

東京外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号: 50292991

野村 恵造 (NOMURA KEIZO)

東京外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号: 60172813

根岸 雅史 (NEGISHI MASASHI)

東京外国語大学・大学院地域文化研究科・教授

研究者番号: 50189362

降幡 正志 (FURIHATA MASASHI)

東京外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：40323729

佐野 洋 (SANO HIROSHI)

東京外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：30282776

林 俊成 (LIN CHUN CHEN)

東京外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70187994

(3)連携研究者 なし